
異界の界

lukewarm

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異界の界

【Nコード】

N4773R

【作者名】

lukewarm

【あらすじ】

世界は物語で成り立つ。
故、世界は物語を欲す。

異界の界 ここは異世界への門。

力を求める者に力を与え、知恵を求める者に知恵を与える。そしてその者から対価を求める。

ここに一人の少年が来た。

少年は言った。

「俺の記憶を払う。それで俺に、力をくれ」

物語の種を持つ少年が、異世界へ舞い降りた。

不定期更新です。思いつきで始めてます。短いのをちよくちよく書くかもしれません。結局不定期です。

世界

世界とはどうやって存在するのだろうか？

それは物語だ。

世界は物語で成り立つ。

物語がなければ世界は成り立たない。

ここは、この世界にある異世界だ。

世界の中に物語を担当する異世界を包含することで、世界の自壊を防いでいる。

逆に言えば、そこに異世界 物語があるからこそ、この世界は存在している。

だがどうだろう？

異世界の物語。それは無限に続き、無限に生まれ、無限に語られるのだろうか？

否。

物語は生まれ、収束し、そこでその世界の物語は終わる。

終わった世界の新たな物語は、その多くは。読み手の期待に添えずに失敗する。

それを防ぐには。

物語の種を 完結した世界ではなく外の世界から呼ぶ。

ここに呼ばれるのは、死が確定し、この異世界を満ちさせる物語を紡ぐことのできる人間だ。

《欲せ。

対価を払え。

さすれば汝に、望むものを与えよう。

そうして世界に降り立ちよ。

古き世界での死を対価に、新しき世界での生を得よ。

ここは世界の門　異界の界。

新たな世界への、旅立ちの扉

それを伝えることが、この異界の界の役割。

さあ

望め。

払え。

生前

それは平凡な日常だ。

いや、日常だったと言っべきだろう。

朝起きて顔を洗い、コンタクトを入れ、食事をし、電車に乗り、四駅先で降り、歩いて高校に行き、ラノベを読んで授業を聞き流し、購買で菓子パンを買い、友人と戯れながらパンを食べ、昼寝して授業を聞き流し、歩いて駅まで戻る　さなか。

トラックに撥ねられる。

迫るトラック。

ああ、死ぬのか。

淡々と、そんなことを考える。

走馬灯なんてなかった。

だって俺には、そんな未練なんてなかったから。

現実残酷だ。

俺は何かにぶち当たり、そして絶望した訳じゃないけども。

現実残酷だ。

現実には何も無い。

俺の大好きな魔法や、超能力や、神や悪魔なんかはこの世にいない。

だから、死ぬならそれまで。

未練はない。

生きれるならその方がいいけど、無理なら諦める。

魔法や、超能力や、伝説の生物なんかがいらないなら、来世や天国なんてあるはずないのだから。

だからこの死を受け入れる。

ああ、なんで死ぬんだろう。

いつも通り生きて、いつも通り退屈な毎日を過……ここ……し……
た……の……に……

……最後、俺が信号無視したんじゃないか。
そもそも、手元の本ばかり読んでて信号自体見てないや。

なんだ、自業自得か。

そう考えると、本当に未練がなくなつた。
トラックの運転手さん、事故起こさせて、本当にすみませんでした。
た。

刹那　世界が暗闇に変わる。

闇は地面から湧きだし、俺を呑みこみ、暗闇へと放り出した。
闇。

それに俺は、歓喜を覚える。
それは、ないはずの“何か”だったから。

「やあ。来たね、物語の種」

その男は闇に浮かび上がるように存在する麗しき青年。
片手に分厚い本を持ち、不敵に笑っている。

「ここが何なのか、気になっているようだね？」
頷く。

「では教えてあげよう。ここ　そしてこの世界について……」

生死の境

対価を支払え……か。

「質問、いいかな？」

「どうぞ」

「あなたは、何だ？」

すると青年は考えるように上を向き、

「そうだね。世界は真実を語ることがを求めているようだ」

電波なことを言い出す青年。……今更か。

「僕は世界に認められた、『物語を紡ぐ者を誘う、人間だった者の一人だ』

「人間……だった者」

「ああ。今の君と同じさ。もつとも、そこまで親切じゃなかったけれどね」

懐かしむように瞼を閉じ、数秒経って目を開ける。

「僕の場合は、世界からの依頼だ。半ば強制であつたけども、僕は納得し、ここで役割を果たしている。世界を作る物語の語り部としてのね。次の質問は？」

案内人、か。

親切なことだ。

「異世界を包含する、や、異界の門……などと云っていたが、異世界はいくつもあるのか？ あるなら選べるのか？」

「幾つかあると云っておこう。ただしそれは選べない。僕に選ばれた時点で君は僕の案内する異世界にしか行けない」

「それではあなたの案内する異世界では、言葉は通じるか？」

「可能だ。元の世界の言語 に対価に、《新しい世界の共通言語》を得ることになる」

「なら言語を複数習得していた場合はどうなる？ 俺も一応日本の高校生だ。英語くらいは最低限できるぞ？」

矢継ぎ早に質問していく。青年もノータイムで答えを返す。まるでこちらの考えていることが分かるようだ。……分かるのかもしれない。

「習熟度に応じて、『新しき世界で滅びた古代言語の知識』を得ることになる」

「その上限は？」

「第一言語を除いた十五ヶ国語以上をマスターすれば、古代言語をマスターしたのと同じになる。君には関係ないけどね」

言葉足らずの質問にも的確に返す。本当に考えを読んでいると見ていい。

「対価を支払えば、望むものを得ると言っていた。同時に、古き世界での死を対価に、新しき世界の生を得る、とも」

「ああ」

「つまりこれは、元の世界での生活 を払い、『異世界での生活』を得た。そういう認識でいいのか？」

そう訊くと男はクスリと笑い、

「ご明察。そこに気付く人は少ないんだ」

並べて語られるから、それぞれ別のルールだと勘違いするんだろう。お生憎様、俺はゲームも漫画も小説もアニメも、ファンタジーがあるなら貪欲に見続けた。そこにあった作者トラップとの心理戦は数知れず。俺自身それを思い付く知能はなくとも、経験ノウハウ則だけである程度は看破できる。言語の質問で似たようなものが出たから、これはただの確認だった。

「となると、支払える対価は元々ないに等しいんじゃないかな？」

ニヤリと男は笑った。

元の生活を支払ったということは、新しい生活を得ることを意味する。

仮に大富豪が新たに何も求めなければ、向こうの世界に行くと同時、向こうの世界での莫大な資産を手に入れる、あるいは、手に入る保障が 知らされるかどうかは別にして あるだろう。

だがもし全財産を対価に、魔法や超能力や、何かを得たのなら。その保証は崩れ去り、無一文で生活することになる。それだけならまだいいだろう。もしその立場が俺なら間違いないとする。

だが、金の切れ目が縁の切れ目、縁の切れ目が命の切れ目、だ。ファンタジーを見るためなら、命なんて安い物。でも、そこで生きれるというのなら、その確率は上げるべき。それに、縁なくして一人で騒ぐなど、現実で妄想するのと何の違いがあるというのだ。

しかしそもそも、金が才能を得るための対価になるとは思えない。いくら金をつぎ込み、恵まれた環境で努力したとしても、真の天才には足元にも及ばない。それは現実でもそうだし、ファンタジーならもっとそうだ。だから金を対価にするというのは、地盤を固めるくらいにしかないはず。もし異世界で同等の金を得る保障があるなら、そちらに回すべきだ。実力に任せたギャンブルでもやりたくはない。

いや、もつと言うなら 俺はバイトとかは大学生になってからするつもりだったし、貯金なんかは一切ない。本やゲームに消えた。つまり金は財布の中のじゃん、じゃーん、えーんと少し。

……地盤固めにもならねえ。

本やゲームに相当する何かが向こうの世界でももらえるとすれば、それは娯楽品ということになる。だが俺にとって最大の娯楽とはファンタジー世界そのものだ。この場合どうなるのだろう？

魔法に関する物でも入手できると考えるべきか？ それならそれで支払う必要はない。

となると真実、俺に支払えるものなんて何も

「……一つ、聞きたい」

答えを待たず、問いかける。

「記憶って、対価に払えるか？」

俺の言葉に、青年は目を丸くした。

「え、ええ。払えます。あなたの意識は、それを価値あるモノとして認めています。価値あるモノは、対価となりえます」

「そうか、それなら　いや、今なんて言った？　『あなたの意識は』？」

すると顔色を変え、弁解するように虚空に向かって頭を下げた。

しばらくすると申し訳なさそうな顔のまま、こちらを見る。

「すみません。世界は続けると仰っています。恐らく、何も変わらないだろう、と」

「……どういうことですか？」

己の意識が価値を決める？　その意味を知っても何も変わらない？

「この場所で支払う対価とは、常に個人の価値観に影響されるのです」

「……？」

「ですから、万人の従う絶対的な価値観ではなく、個々人の決める『これなら払う価値がある』ものならなんでもいいんです。客観より主観が優先される空間がここなのです」

「つまり、その人が大事にしてるモノならなんでもいいってことか」
「平たく言つとそうなります。思い出のペンダントでも、お金でも、命であっても。それを大事なモノだと認識し、そしてその上で支払うことができるなら、それは対価となりえます」

「じゃあもし仮に、寿命を何十年分つき込んでも、本人が自分の命をどうでもいいと思っていれば……」

「得られる力は微々たるものです」

ふうー。

一息つく。

考えを纏める。

「元の世界　を対価に《新しい世界》を得たつてのも、俺が考えたからそうなった？」

「ええ」

「なら、俺の言った支払える対価がない、つてのは、俺がそういう

認識だったからなかったのか？」

「逆に言えば、あなたがそういう認識だったからこそ、あなた自身の考える《保障》というものがあなたに適用されると言えるでしょう」

まるで。

まるで、道化じゃないか。

これだ、これだよ。だから嫌なんだ。

俺は下手に理論で武装しすぎた。あまりに知識を得すぎた。小賢しい思考ができてしまう。そして肝心なところが抜けている。

だから、だから主人公には成れない！

こうした人間が主となれるのは、殺伐とした世界で死に物狂いになるか、周りを従わせて戦う能力を持つくらいしかない。

違うんだ、俺が求めているのはそうじゃないんだ！

俺は魔法や超能力や神や悪魔や魔物たちと戦い、仲間と共に命を賭け、できれば美人さんと恋をしたい。

だが、俺がこんな思考だからこそ、俺は主人公になれない。邪念があるから、正義の主人公には成れない！

だから、俺がそう成るには、死ぬか、記憶でも失わない限りだめなんだ！

そして、だからこそ俺は物語を作る者として選ばれたのだろう。

記憶を支払う人間。そして得る力。案内人すら驚く対価と、その重さゆえ得る多大な力。物語足り得るには十分だ！

俺にそんなこの世界の真理を教えたのも、俺が記憶を捧げるから。それでも絶対的な、心が認める価値は変わらないから。だから、何も変わらない。

「俺の記憶は重いぞ。記憶喪失なんてなったことないから分からないが、今の俺にとっては俺の死同然だ。俺の死で、俺じゃない俺にその対価を支払うんだ。安いわけがない。それに俺はファンタジーの為なら命なんざ安いと思っているが、それはファンタジーこそが高いのであって、俺の命が安い訳じゃない。」

俺の命たる記憶　思い出部分、　エピソード記憶　を支払う！
他の記憶、つまり知識と人格はそのままに、俺を俺のまま思い出
のない俺として異世界に渡らせてもらう」

記憶喪失ネタをいくから見てきたと思っっている。とつくの昔に勉強
済みだ。

「そしてそこで生き抜くため、　元の世界の常識　を払い、《異世
界の常識》を得る」

「承った。して、記憶の代わりに得るモノは？」

「俺が求めるのは　」

死後

う、ううん……

なんだ？ 目が……前が、見えない……ばやけてる……

手の土汚れを払い、指を右目に当てる。そしてつまむと、コンタクトレンズがあつた。

「どうして……？」

コンタクトを外した目は、正常に見えている。目が悪くないのに、コンタクトをしている意味がわからない。カラーコンタクトという訳でもないのに。いや、あれ、俺は目が悪くなかったっけ？

思い出そうとする。

ッ！

「え……？」

反射的に頭を押さえる。

何故、どうして。

「記憶が、ないんだ……」

茫然と俺は呟いた。

左目のコンタクトも外し、その場に捨てる。このままつけている必要はないし、保存液もない。捨てるしかなかった。

数分空っぽの頭を全力で動かしてみたが、答えは出ない。

ここでもう一つとするのも考えものだろう。

俺はようやく周囲を見た。

ふむ。

俺がいたのはどうやら道のような。と言っても整備された様子はなく、平原の行き来のしすぎで削れてきただけのもののような。

俺自身、何も持っていない。元々何も持っていなかったのか、盗賊に気絶させられ盗られたのか、気絶していたから誰かに盗られたのか。

考えても分からないことは、忘れよう。

幸い、道の先、地平線の手前辺りに街らしきものが見える。左右は平原、森、そして地平線の彼方に山脈が見える程度で、どう考えても行き先は一つしかない。

だけど

「遠いよなあ」

徒歩一時間は覚悟しなければならなそうだ。

街に辿り着いた。

……どうしよう。

何も分からず辿り着き、頼る者なく行きついた。

持ち物はなく、金銭の類は一切ない。

働こうにも、薄汚れた服を着、記憶の怪しい身分不明の人間を雇ってくれるとは思えない。

八方ふさがりだった。

……誰か親切な人はいないのか、なーんて目を配るが、そもそも俺はそこまで困った風にしていないのだから気付くはずがない。

しょうがない。

怪しまれるのは承知で話を聞いてみよう。

「すみませーん」

「見ない顔だね。新鮮な野菜が揃ってるよ、買ってきな！」

と言っても、通行人に話しかけるほどの度胸はない。相手から望みの返事が返つてくるとも思えない。無難に、店を構える威勢のいいおっちゃんに声をかける。店と言っても、街路を歩いていたら両脇に屋台のように品物が並べてあるだけなのだが。

「ああ、ええと、すみません。働くところなどありませんか？ 今

お金が全くなくて」

「あら、兄ちゃん大変だねえ。財布でもおとしたのかい？」

ええ……、と口を濁す俺を「またいいことあるさ、落ち込むな！」

と笑って励ましてくれる。

「残念ながらこの辺りは皆余裕がある訳じゃないんでね。聞いて回っても同じだろう」

そう軒並み連ねる屋台を示すように言う。

「だから大人しくギルドに行くのを勧めるぞ。見ない顔ってんだから、旅の人間だろう？　そういう仕事嫌でこっちの仕事探しに来たのかもしれないが、背に腹は代えられん。そっちで仕事してきな」

ギルド　同種の仕事を持つ者たちの組合のことだ。互助組織だったり、独占、流入入の管理をする組織だったり組合によって姿は様々。

男はその中の冒険者ギルドを指したのだろう。

「え、ええ。そうします……」

言われてみればそんなものもあつた気がする。

「場所を聞いてもよろしいでしょうか？」

「この通りを抜けて右だ。西の街道から来たなら正面に見えるんだが、どうやら兄ちゃんは東の街道から来たようだな。王都まで出稼ぎかい？」

はははそうですよ、と乾いた笑いでなんとか繋ぐ。

「まあギルドマークの入った看板がよそよりでかいから、一発で分かると思うぞ」

ありがとうございます、と丁寧に礼を言つと、「恥ずかしいわい！」と豪快に笑って肩を叩かれた。

「それじゃ、金が入ったらぜひうちに！」

しっかりと宣伝して、見送ってくれる。

いい人だなーと思いながら、言われた通り、屋台並ぶ通りを抜けて右に曲がる。

「あー、あれかな」

ギルドマークとかいうのに覚えはないが、三メートル近い剣のイラストが描かれた板を入り口の上に掲げてあることから、そうなのではと思う。

少し離れて伺っていると、人の出入りも確認される。西の街道とやらの真正面なのだから、少なくともうかがわしい施設ではないだろう。

「うしっ、行ってみるか」

小声で自分を激励すると、冒険者ギルドへ。

「こ、こんちわー……」

尻すぼみになる声であいさつしながら、ギルドへと入った。

そこでは、何故か男たちが殺気立ち、俺を睨んでいた。

「な、なんで？」

眼

殺気だった男たちが、得物を抜いて俺に向かってくる。

「ひっ、ヒイイ！」

俺は情けない悲鳴を上げながら、入ってきた扉から急いで逃げる。転がるようにして外に出た。

中から何人も人が出てくる。

「な、なんで俺に向かってくるんですか!？」

俺の悲鳴に、殺気だった男たちは答えない。じわりじわりと距離を寄せてくる。俺は尻餅をつきそうになりながらも、なんとか後ずさり。

しかし遅れて扉の影から顔を出した男が答えてくれた。顎鬚の似合うナイスガイだった。

「なんていうかねえ……」

周りの男たちは未だにじり寄ってくる。ダッシュで逃げたいが、足が動かない。それにそうした瞬間なんかヤヴァイものが飛んできそうな予感がぴりぴりする。

「うちの姫さんが、『次に現れる男がかなり強い』って予言した後、『お前らじゃ無理だから諦めろって』って煽っちゃって。皆姫さんに好かれたいからそいつを倒す。」

男は瞬時に頭を引き、扉を閉めて壁にする。遅れてナイフが数本突き刺さる。

「怖い怖い」

再び顔を出してそう言うと、ギルドの中に戻っていった。

男たちが襲ってきた訳は一応分かったけども、無茶苦茶すぎる! か、かなり強いってなんのことだよ! 俺に戦う力なんて……あ、あった。

彼らから逃げられる気はしない。そして倒す力がある。なら、倒すまで。

何故か俺は、その得体のしれない力というモノに興奮していた。それを見つけた瞬間、逃げるという選択肢が一切消え、それを使いたいという衝動に駆られた。何というか、そう。今まで欲しかったけれど手に入られなかった物に、初めて手が届いた。そんな、感触。

知識を手繰ると、違和感の塊が存在した。それが俺の持つ力。俺の持つ『常識』に照らし合わせると、この世界に存在しない力だ。だが何故か俺は知っていて、使い方まで分かっている。だからこそ違和感。

使い方はシンプル。

一点を睨み、そこを心の中で捻じる。すると捻じった場所の空気が歪んだ。

まだだ。

相手はまだじわじわと距離を詰めてくる。

俺は最初に歪ませたポイントの横を捻じり、『歪み』を増やす。

『歪み』一つはピンポン球くらいの大きさだ。それで線を結ぶように、等間隔で横に作り上げていく。

最初に作った『歪み』は俺のすぐ目の前だったが、俺は後ずさり、相手は前進している。『歪み』は高さ一メートルくらいのところに鎮座し、距離は互いの真ん中。五メートルずつくらいだろうか。急いで仕掛けないと、『歪み』を仕掛けた意味がなくなってしまう。

俺は彼らに背を向け、一步踏み出した。

背後で砂を蹴る足音が聞こえる。直後。

「がっ………！」

「ぐふっ」

「うっ………」

俺は横に跳び、後ろを振り向く。予想通りナイフが一本飛んできていた。

走り出した数名が、俺の作った『歪み』の壁に腹からぶつかり悶絶したようだ。『歪み』は宙に浮かぶ障害物。どうやっても取り除けず、動かせない『点』。彼らは走る勢いそのままに、壁にぶつかったようなもの。だが『歪み』は点なので、壁にぶつかるより面積が小さく、その分圧力も大きい。運悪く鳩尾に入った何人かはその場で昏倒している。

先に走り出した何人かが急に止まったことで、後ろの人間は足を止めざるを得ない。

その間にも俺は再び『歪み』を作り、トラップを仕掛けていく。今度は斜めに設置。立ち止まった男たちの両脇から、俺を結ぶ直線に垂直に仕掛ける。

男たちは予想通り、正面で倒れた男たちを避け、両脇からこちらへと走ってくる。

俺はタイミングを合わせ、わざとらしく両手を壁に沿うよう振る。すると男たちは『歪み』にぶつかり、またも足止め。体をくの字に折って後ろに倒れる。少し走る勢いが弱かったか、倒れる者は大勢だが、気絶する者はいなかった。

またそれぞれの脇からこちらを結ぶ直線を妨げるように『歪み』を作りながら、控え目に声を上げる。

「戦いたくはないんだ。武器をしまってくださいかな？」

半分は壁に弾かれて倒れているが、運よくそれを免れた出遅れ組もいる。

彼らもこのまま進めば正体不明の『攻撃』をされると思い、たたらを踏む。

だがやはりというべきか、血気盛んな何人かはそれらを避けてまたこちらに向かう。

俺もまた手を伸ばし、彼らが壁にぶつかる直前、腕を振って演出する。

三回も攻撃を見せられ、その原因が分からない。分かることは精々、その衝撃に合わせて手が振られること　と相手は誤認する。

残った男たちは完全に足を止め、両手を上げて無害を示した。最初の血気盛んな状態が嘘のようだ。仲間がやられる様子を見て頭が冷えたのだろう。

それでもまだ抵抗する気なら、手を振りかぶって脅すつもりだったが、不要のようだ。下準備が無駄に終わったが、それで何より。俺はそれぞれの『歪み』を見て、ほどけるよう念じる。すると『歪み』は最初からなかったかのように消え去り、元の空間に戻る。俺がそこを通ってもぶつかるとはならない。

「危害を加えるつもりはありません。手を降ろし、武器をしまってください。あと、倒れた人たちの介抱もお願いします」

俺は自然にギルドの扉に向かう。後ろから殴られたり、正面からでも近ければ避けることはできない。相手に背を見せている状況だが、一応街中だしあまり物騒にはならないはず……今の今では信賴性に欠けるが。だが怯えてしまつては、こちらのタネがバレやすくなる。余裕そうに振る舞うことで、攻撃を躊躇わせることができるはずだ。

その甲斐あつてか、後ろから　もちろん前からも　攻撃されることはなく、無事にギルドへ辿り着くことができた。

完全勝利の瞬間。

頬が俺の意思を無視して釣り上がる。

幸い扉は目の前。誰にも見られていないだろう。

俺は顔を片手で一揉みして元の表情を取り戻す。

深呼吸。

では行こう。

今一度ギルドの扉を開く。

先ほどのように殺気だっていることはなく、「本当に生き残ってる」という感嘆の声が聞こえてくるほどだ。

居心地悪く出口で突っ立っていたが、先ほど顔を見せた男が「こ

「うちに来なよ」というので、そちらに向かつてみた。

冒険者ギルドは酒場も兼ねているようで、あちこちのテーブルに酒や料理が置かれてあった。

俺は男のテーブルの隣に立ち、声をかける。

「えーっと、説明ありがとうございました」

男は食べていたパスタを置き、「どうも」と言つて向かいの席を指す。従う俺。

「まあなんだ。不運だったね」

確かに不運は不運だが、先の説明を聞く限り『姫さん』とやらが元凶な気が。

「あの、先ほど言つていた『姫さん』と言つのは？」

分からないことは素直に訊くのが一番だ。何も知らない状態で駆け引きできるはずがない。

「うん、まあそれは本人に訊くのが一番だろう」

「？」

首をかしげる。しかしすぐ隣でコトリと音がすると、十五、六歳くらいの少女が椅子を持って俺の隣に運んでいた。

少女と目が合う。

「こんにちは！」

「こ、こんにちは……」

少女のにぱっという擬音語の似合う、天真爛漫な笑みと挨拶に、俺は目を逸らし、詰まりながらなんとか返す。

「や、姫さん。こいつが『予言』に出たやつでいいんだよね？」

「はい、たぶんそうなのです！」

この子が『姫さん』？　じゃあさっきの男たちは……

「ロリ……コン……？」

「冗談だよ。真に受けるな」

男が笑いながらツツコミを入れ、俺を見定めるように覗き込む。

「ガラムと呼ばれている。こっちは」

「ランです。よろしく願います！」

元氣よく答える少女。

ガルトがお前は、と問うてくるような目を送ってくる。だが、答えることはできない。

「……」

どうしようか迷っていると、ランと名乗った女性が首を傾げる。よくよく見れば美少女な訳で、首をかしげる様はかなり可愛い。

「名前、なんて言うんですか？」

「え、えっと……」

名前、名前……名前なんてあったか？ いやないね。

じゃあ偽名は？

ガルト？ ラン？ これに沿うような名前？ 頭の中はもつと非
凡で、聞き慣れた『名前』ばかりが並ぶ。

くそ、どうしたら。

偽名、名無し、眼に宿る力、歪み 記憶喪失、魔眼……

「な、ナナメ！」

気付いたら、

「ナナメって言うんだ。よろしく」

『ナナ』シと『メ』ニヤドルチカラから、ナナメ。

アクセントの違い、関係のない意味の言葉が頭を過ぎったが……
もう遅い。

眼（後書き）

最後の名前決定、「生死の境」で語られた内容に矛盾してるよう
ですが気のせいです。
……気のせいです。

予想

「よろしく！」

偽名というにも違和感が拭えない名前を、疑いなく信じられるこの娘が怖い。

男の方は何か考えるような顔をしていたが、まあいいかと言わんばかりに目の前のパスタを食べ始め、

「お前も遠慮するな」

と俺にサラダを勧めてくる。隣の少女は俺の前にあつた皿を取って、パスタを食べていた。

たぶん……

俺がやってくるのが見えた 新しい椅子が必要 ランが椅子を取りに行く ガルムがランの椅子を俺に勧めてしまった 仕方なく自分分は新しい椅子に座った。

……だろう。きっと。

なんだかいつも以上に妄想力 改め妄想りよ……うん、妄想力が遅い。俺の思考は俺に想像力という言い訳すら与えてくれないようだ。あといつも以上つて何よ、いつも、って。

「あの、俺お金ないんですけど……」

サラダを勧められるのはいいが、払う金がない。この人も請求するつもりで勧めたんじゃないだろうが、一応言っておかなければ。

礼儀、大事。図々しく始めるのは俺の主義じゃない。

「ならなおのこと喰え」

「そうです、食べてください」

「……どうも」

二人が勧めるので、ありがたく 皮肉は一切なしに 頂くことにする。お箸もフォークもなかったのでつまむ羽目になりました。しゃきしゃきのサラダが……うん、普通。

さすがに一人素手でつまみ続ける気もないので、カウンターにフ

オークをもらいにいく。木彫りで手作り感があっていいなと思った。戻りながら、二人の様子を窺う。

ガルムさんは、さっき見たとおり顎鬚の似合うナイスガイ。眼の色はなんと言えがいいのだろう。狼を連想させるような黄色がかった銅の色、だろうか。あまりそういうのは詳しくないので分からない。髪は黒でそこそこ伸びている。サン格拉斯があれば完璧だと思う。

対してランは、お姫様と呼ばれるのも納得な、朗らかで愛らしい表情をしている。円らかな瞳はグレーで、長い髪はブロンドのストリート。顔もお人形というような言葉が似合う。

俺が見ているのに気付いたのか、ランはニコッと笑ってくれた。うつ……何もしてないのに心が痛い。

「ああそつだ、姫さんが煽ったとか言ってますでした？」

だからどんなドS女が出てくるかと思っていた訳なんだが、こんな純真無垢な少女（対して年齢変わらないだろうけど）で驚かされた。

「ああ、それも嘘だ」

「オイ」

人を食ったような態度にツツコミを入れる。しかしこの男、堪える様子はない。ナイスガイとか褒めた俺に謝れ。

「じゃあどうしてあの人たちは襲ってきたんだ？」

ギルドに戻ってきた人たちを指して訊く。

「ああ……カルシウムが足りてないんじゃないか？」

「ガルムがつつついたんでしょ！」

ランがガルムに怒る。

「この人ったら、『賭けをしよう。次来る男に勝てたら金貨をやる。負けたらプライドを売り飛ばせ』とか言って、あの人たちを焚きつけたんですよ」

似てない声マネをして、むうと言わんばかりに頬が膨れ上がるラン。

ランの言う言葉だけで、あそこまで殺気立つとは思えない。もつと罵詈雑言を吐いたんじゃないだろうか……。恐ろしい。本当に俺に謝れ。

「いいじゃねえか、勝てる勝負だったんだから。お陰であいつらの面目丸つぶれ。バカどももここでいい顔できないってな」

せせら笑うガルム。ガイって感じの印象はもう欠片も残っちゃいない。ただ、それでも絵になるこいつもこいつだ……。妬ましい。

「そろそろ本題入っていいですか？」

なんかこの男に遠慮するのも嫌になってきたので、俺はさっさと本題に入ることにする。

「『予言』ってなんですか？」

「私の《力》ですよ」

「力？」

「はい。と言つても、《継承》したものなんですけどね」

《継承》？ 誰かから受け継いだの？

俺が疑問符を浮かべていると、それを察したのかガルムが問うてくる。

「どうした？」

「え、えーっと……」

何も覚えてないんですと答えるのは簡単だが、さっきバカみたいに偽名を名乗ったばかりだしなあ。ええい、ままよっ。

「俺、名前以外全く覚えてない訳でして」

かくかくしかじか、と言うほどのことはない。とりあえず名前だけ覚えてたという嘘について、起きたところから今までのことを全部話した。もちろん、襲われた恨みをふんだんに込めて。

「そりや大変だったな」

「大変だったんですね……」

オイ前のどうでもよさそうな奴。オイ後ろの頭回ってない奴。もう嫌だ……

「そーゆー訳でして、この世界について聞かせてもらえませんか？」

かったりい、と面倒そうな顔をするガラムと、喜んで、と嬉々として話し始めるラン。ずっと思ってたけど、なんでこの二人一緒にいるんだ？

「ナナメさんは、この世界に『上の世界』からやってくる人間がいることを知っていますか？」

上の世界？ 日本とか、アメリカとかがある世界のことだろうか？

「えと、たぶん。あと呼び捨てでいいよ」

そう言うと言は「えーと……」と躊躇い、

「ナナメ……さん」

ハードルが高かったようだ。

俺は苦笑して、続けて、と流した。

「上の世界の人間は、この世界に降りてくる時『案内人』に出会います。そこで《力》を望めば、対価を支払うことでそれを得ることができるそうです。そうして降りてくることを《降臨》と呼びます」

ああ、それなら『上の世界』ってのはさっきの認識であっているな。

「そして昔から今に至るまで、何千何万という人が《降臨》したわけなのですが、そこで戦人の多くがあることに気がついたのです。《降臨》した者が得た《力》というのは、必ず何かに受け継がれているということに」

「……？」

「ある人が得た《魔法の才能》は子供に受け継がれ、またある人が得た《新しい武術》は弟子に授けられ、《強力な剣》ならば持ち主から奪い取った人が使い、またその人から奪い取った人が使う、という風に。受け継がれるというより残されていると言うべきかもしれません。《財産》などは使えばなくなるものですからね」

才能も、武術も、剣も、金も、なんらかの対価を支払い、そして得たもの。仮に 対価 と《力》が等価ならば、《力》は残される分、二人目以降は純粋なプラス。三人、四人と続けていけば、それ

が無形物の場合ならば顕著になる。結果、プラスマイナスゼロではない……？

「何故そうなるのか、正確なところは分かっていません。ただ『案内人』が世界に物語を満ちさせるため『案内』をしていることを考えると、世界に『物語』を作るための基盤作りでは、と言われています」

話がややこしくなってきた。ただ、意外なことに頭の中ではそれに対する答えが既にあった。

世界は物語で成り立っている。

そのために世界は、閉じた世界の外側から、新たな因子を取り入れる。

だから世界に因子は残る。

だから《力》は受け継がれる。

「そしてその《力》の、特に希少性の高い力を継いだ者は《継承者》と呼ばれます」

「それがランというわけか」

「はい」

ちよつと整理させてくれ、と腕を組んで唸る。

数十秒の思考の末、

「ハア……」

思わず口から溜め息がこぼれた。

「どうしたんですか？」

「いや、どうにも分からないことがあって」

それと聞いてばっかりな自分が情けなくて。

「なんですか？ なんでも聞いてください」

「いや、そういうんじゃない、道理として分からない話。

どうして俺が記憶を持ってなくて、《力》を持っているのか。いくら考えてもきっちり嵌まる答えがなくて」

肩を竦める俺。

「ナナメさんはどう考えているんですか？」

「うん、まずは盲点から考えていった」

「盲点？」

まあ気付いてたら盲点じゃないからな。

「と言っても、俺の盲点じゃなくて、漫画やゲームの主人公がよくやる盲点」

疑問符を盛大に浮かべるラン。これだけだとよくわからないだろうから続ける。

「記憶喪失って、物語のキーになることって多いからね。傍から見たらフラグが乱立してあからさまなのに、何故か主人公たちってそれをつなげられない。仕方ないとも思うけど、俺はそうじゃないと思うからね。気付く限り、王道に対するメタ行動をさせてもらうよ。」

こういう特別な人の話を聞いたら、聞いた本人は『そんな人いるんだー』って他人事で済ましてしまう。本当は記憶喪失のお前もなのに。そんな感じに進むのが主人公だと思うんだよね」

「????」

「ああ、俺が主人公だって言ってる訳じゃないよ。そんな熱血的な、運の強い人間になった覚えはないからさ。」

何が言いたいかっていうと、俺はその可能性を考えて自分のことを振り返ってみた訳。そしたら矛盾にぶつかった」

ランは俺の言葉についてこれていないようだ。

「何か質問ある？」

「まんがやげえむって何ですか？」

そこか、と自分の迂闊さに苦笑。

「マンガはイラスト仕立てで進む物語。ゲームは……説明しにくいな。テレビとか言っても伝わらないだろうし……」

冷静に考えると、ゲームというものの不可思議さが知れるというものだ。

「説明が難しいね。言ってしまうえば『音や映像に合わせて操作する

遊び』だろうか？ 俺が今回言いたいのはそのストーリーをつけたもの……だけど、忘れてくれていいよ」

縁もないだろうしね、と付け加えると、ランはそれで納得したようだ。

「ではふらぐやおうどう、めた行動とはなんですか？」

質問を重ねてくる。……少し発言がマニアックすぎたようだ。

「……ごめん、次から言葉を選ぶことにするよ。」

フラグってのは、言うなれば使い古された設定、あるいは前触れかな。いや、ちょっと違うか。

いいや、具体例を挙げよう。まずストーリーの最初に『お姫様が攫われた』としよう。これをフラグとすると、次の展開がいくつか想像できるんだ。代表的なもので言えば『赤い帽子の配管工が助けに来る』……今のは忘れて（言ってる俺が分からないし）。気を取り直して、『王子様が助けに来る』を挙げることができる。お姫様が攫われた以上、誰かが助けに来るという流れがなければ話として成り立たない。だから次の展開を決定づける出来事が『フラグ』。一応付け加えるなら、普通の人は使わないので安心して「なるほど……」

真剣に頷くランを見て、下らないことを吹きこんでしまったと自己嫌悪。

「王道ってのは、物語でよくつかわれる基本的な展開。」

メタは超越したって意味だったはず。今回言いたいののは、王道つまりよく使われる展開とは違う行動をとりたいってこと。

他に何か質問がなければ元の話に戻す 前に「

下らないことを喋り続けたせいで、喉が渴いた。ちょっと水をもらつてくると言ってカウンターの前に立つ。水の入ったコップはこちらも木製で、グラスじゃないことに激しい違和感を覚えるが、これが普通だと常識が訴える。違和感は常識に負けました。

テーブルに戻りながら、考えに耽るランを見る。可愛い顔に皺を寄せ考える様は、まるで……まるで……女神のようだ。いい喻えが

思いつかなかったたので安易な言葉に頼ってしまいました。ごめんなさい。

「で、質問ない？」

「大丈夫です、続けてください」

続き促すランに、水を得た俺の舌は滑らかに語りだす。

「もし俺が記憶喪失だった理由が、『《超越者》』になるため、記憶を対価に支払ったのだとしたら』、という前提で話を進める。

まあ現段階で一番ありそうだと思うし、謙虚な人間や『主人公』って奴ならそういうのが一番盲点になりやすいからね」

ずっと黙ってるガルムを不思議に思い、初めてそちらを意識した。見事にいなかった。音も動く気配もなかったが、俺の能力がそこまで優秀なはずはないから、見逃したのだろう。あるいはあちらが気取らせないよう動いたか。どちらにしろここにはいない。さて、どこに行つたのやら……

「それで思つた矛盾なんだが、一つ目は俺が自分の記憶を対価に支払うとは思えない」

「どうしてですか？」

「簡単な理由だね。記憶喪失って言葉にするは簡単だけど、それはその人の死と同義だと思うから」

並行世界が存在する、そう仮定する。そこで自分が並行世界の自分と出会う。そこで出会った相手は顔も名前も人格も同じだが、自分は相手の考えていること、記憶していることを知ることはできない。並行世界の自分とは、果たして本当に自分なのか？

自分は相思相愛の相手がいて、その人と死別した、と仮定する。そして自分はその後、愛する者との死別を乗り越え、また新たな相手と関係を築き上げた、とする。さてこの状況で死者の蘇りというものが存在する、と仮定しよう。死者は蘇り、自分は過去愛した女性と出会う訳だ。さてその時、自分はどちらの女性を選ぶのだろうか？

記憶喪失なんて、それらと同じこと。

認識できない自分は自分なのか？ 過去の自分と現在の自分は同じなのか？

だから俺は、記憶なんて大それたもの、対価に支払うとは思えない。感情が昂つてつい言ってしまったとか、自分の死を対価にしても得るべき何かがあったとか、そんなことがない限りは。

「だから俺が、自ら望んで記憶を捧げるとは思えない。理由その二。知識になにか齟齬がある」

「ソゴ？」

「ああ。その前に一つ質問なんだけど、『神様』と出会ってからこの世界に降りてくるんだよね。その時、『神様』から何か与えられたりしないの？」

少女はえと、と様子を見るように語りだす。

「ほとんどないと聞いています。唯一やることと言えば、元の世界の言葉をこの世界の言葉に直すことくらいのです」

「うん、なら俺の推論通り、かな。この話の前提は『俺が 記憶を払った』ということ。だが、俺は見ての通り聞いての通り、結構悪知恵の働く人間でね。もし俺が 記憶 を払ってまでこの世界に降りてきたのなら、同時に記憶がない状態で生きられるよう、なんらかの補助を入れると思うんだ」

「……？」

首をかしげるラン。だが俺はまだまだ饒舌に語りだす。妄想が止まらない。そしてこんなのを静かに、呆れる様子なく聞いてくれる人とも久しぶりに出会った 気がする。

「対価 で《力》を得るなら、そこに《記憶を失ったが、そのことに納得する》という結果を加えるか、 記憶を失うことに了承する今の記憶は失わない という前提を付け加えるはずなんだ。得るものが《力》になるもの限定なら、後者だろうけどね。

それでなくとも、俺の持っている知識はどこか半端だ。頭の中を探れば、さっき外で使った《力》の知識や使い方は出てくるけど、原理やどこで手に入れたかは全く出てこない。ここにたどり着いた

のも『冒険者ギルド』の話聞いたからなんだけど、でもギルドという存在の知識はあった。なのに《超越者》や《継承者》なんていう、知らない単語が出てくる。もし本当に知識を《力》として得たなら、こんな不完全にするはずないんだ。やるならもっと徹底的にする。だから『俺が 記憶 を払った』という前提は間違い」

「なるほどー」

結構難解な話をしたつもりなんだが、先方は全く気にしていない。理解しているのかいないのか。

「それではナナメさんは《継承者》でしょうか？ ギルドは知って当たり前ですが、《超越者》や《継承者》なんて言葉は、騎士や冒険者みたいな戦いを専門にする人間しか知りませんかね」

……分らないこともない。財産を継承しても、あるものを継ぐのは当たり前。美しさを継承しても、遺伝子を考えれば違和感はない。戦いの技能、それもとりわけ特殊なものでなければ、継いだとも意識せずに継いでしまう。だからそれに気付いたのは戦闘にかかわるような人間だけ。

「確かにそうかもしれない。でもね、俺には上の世界の知識もある。だから《超越者》と《継承者》、どちらかというところ《超越者》よりだ」

ランに話したことで、答えが絞り込めた。

「論点は三つ。俺の性格、知識、技能。それぞれ考えていくと、答えは二つ……あ、いや、三つに絞り込める」

わくわく、と次の言葉を期待するラン。

「一、《魔眼》を持って《超越者》となり、しばらくこの世界で生活したが、なんらかの要因で記憶喪失になった。

二、俺は上の世界からの人間であったが、元《魔眼》の持ち主から《魔眼》を受け継ぎ、なんらかの要因で記憶を失った。

三、この世界に住む一般人であったが、何らかの要因で《魔眼》を持ち、その時記憶を失った。同時に上の世界の知識が流れ込んだ。

この三つだ」

一は 記憶 を支払わない俺と、上の世界の知識と《魔眼》を持っていることからの予想。

二は一の《超越者》が《継承者》に変わっただけのパターン。

三は《魔眼》こそが諸々の鍵を握っているという予想。論点を挙げていったら思いついた。

「一は俺が《超越者》、二は《継承者》、三は力には対価が必要だろうつて考えから。絞れるのはここまで。

……ふう。聞いてくれてありがとね」

俺も俺自身の素性を予想できてよかった。寝る前に一人でうんうん唸るとか、寂しい。

「いえ、こちらこそ。おもしろい話ありがとうございました」

丁寧に頭を下げるラン。いい子だなあと改めて思ったところで、

「話は終わったか？」

ガルムが現れた。

「はい！」

元気よく返事するランと頷く俺。ガルムは椅子には座らず、立つたまま話を続ける。

「こっちは仕事ができた。お前のお守りもこれまでだ。王都まではその少年にでも連れてつてもらえ」

そう言つて肩に提げた剣を示す。二メートル近い長さの大剣が背負われていた。その大きさと、それを平然と提げるガルムに驚きの表情を隠せない。

その俺のマヌケな顔を見て何を勘違いしたか、ガルムが「オイオイ」と呆れるように、皮肉るように言ってくる。

「俺がタダでメシを食わすと思ったのか？ あのサラダは姫さんのお守り代だ。足りない分は講義代だと思つとけ。あと自分の金ないのに水も頼んでたし、文句はないよなあ？」

クッ！ いい人だと思つた俺に謝れえ！

「え？」

ラン、お前は悪くない。悪いのは全部その男だ。

「つて水、タダじゃないの？」

俺の言葉に怪訝な顔をするガルド。

「当たり前だろ。一部の流域ならともかく、王都への休憩地点として作られたこの街に、水が余ってると思ってるのか？」

水と安全はタダ。そういう考えが、頭のどこかにあったようです。

「あ、あの…… ナナメさん？ 嫌なら別にいいんですよ？」

悲しげな顔で聞いてくるラン。潤んだ瞳が反則すぎる。

「いや、そうじゃない、あの男に嵌められたことが悔しいだけなんだ……」

そう言つとランはニパーツと笑い（あれ、それはそれでどうなんだ？）、「

「お願いします！」

俺の手を両手で握りしめる。

「お、おう……？」

俺はそんな、肯定とも否定ともとれない言葉を、疑問交じりに返すしかなかった。

予言

「どうしてこうなった」

1 嵌められたから。

2 涙に負けたから。

3 自分のためになりそうだったから。

答えは全部です。

腹立たしい男がいなくなった後、俺はランに問うた。

「どうして俺を同行者に？」

「予言に出たからです」

予言。そう、肝心の話をしていなかった。

「その予言って、一体どんな《力》なんだ？　　どういう風に俺が出たんだ？」

ん、とランは頷き、

「ナナメさんになら教えてもいいですよ」

その前に場所を変えましょう　　そう言われ、立ちあがり進んだランの後に続く。ランは料理を出しているのとは別のカウンターへ向かい、そこで幾つか言葉を交わすと、関係者以外立ち入り禁止な雰囲気のある奥の扉へと向かう。いいのかとしり込みをする俺に気付き、手招き。

大人しく付いていくと、彼女は勝手知ったる様子で廊下を進み、一室へと入る。

「ここは……？」

「ギルドの面会室です。防音効果も高いですし、誰も入ってきませんから、内緒話もし放題です！」

カウンターで一言二言告げただけでこんな部屋が使える。ひよつとすると、姫って言葉は本当本当なのかもしれない。

部屋は木でできているからか落ち着いた印象を与えてくる。中央

に革張りのソファと木机。それを横から見下ろすように、仕事机が置いてある。面会室というのに間違いはないようだ。

周りには調度品がいくつか。壁際に置かれた観葉植物、仕事机の上の花瓶に入った花。それらは窓のないこの部屋にやすらぎを与えてくれる。防音効果も高いと言っていたし、飾り気のない部屋に華を添えたといったところか。

「ナナメさん、遠慮しないで座ってください」

立ち止まって部屋を観察していたのだが、ランには遠慮しているように映ったようだ。俺は頭を軽く掻きながら「ごめんごめん」と言ってランの対面に座った。

「えと、それじゃ聞かせてもらうけど、ランの《予言》の力って一体どういうものなんだい？」

少し躊躇うように聞いたが、ランは笑顔で頷き話し始めてくれた。

「《予言》の力はですねー……」

曰く、未来を知る力であるという。

……分かってるよ！

具体的な内容だが、彼女の《予言》とは「予め言う」ことなのだという。なんだそりやと思ったが、話を聞くと確かにその通りだと納得した。

彼女の力は、「予め」、つまり、前もって「言う」のだ。

何を？

未来を。

ただし彼女の力の発現は運任せのようで、歩いている時ふと言ったり、会話中に突然予言を始めたりと苦労している様子。少なくとも自分の意志で押さえることも始めることもできない。

肝心の内容だが、ランのことだけを予言する、ということ以外は極めてランダムのようなのだ。ランダムというのは内容にしてもそうだし、未来に関してもそうだ。予言して「数秒後、スリに会う」や、「五十年後、湖の畔で転ぶ」といったどうでもいいことまで様々。その中でもとりわけ衝撃的だったのが、先ほど酒場で口走った「

扉を開けし者、無双の《力》持つ運命の人である」というものだと
言う。

「……その予言って、信頼できるもんなんだよな？」

「はい！　今まで外れたことは一度もありません」

困った。何が困ったって、こんな可愛い子に結婚を迫られて顔が
にやけて困る。ふふふ、ふははははは！

「冗談は置いていて」

小声でボソツと戒めるように言う。

「力ってそんだけ？　それならわざわざここで話すようなことじゃ
ないんじゃない？」

その予言が原因で俺は入り口で死の危機に瀕した訳だから、その
ことはあの酒場の人間たちは知っているはず。それでもここで話す
必要があるとすれば……

「実は、《予言》には二つ秘密があるんです」

「……今なら間に合うと思うんだけど、俺に教えちゃっていいの？」

「はい。ナメさんは、運命の人ですから」

……眩しい。眩しすぎるよこの子。

俺が自身の汚さを再確認している間に、彼女は俺の隣に座って腕
を組んだ。

顔が赤らむ。俺と彼女。

「私の《予言》は、私以外もでき　『沈む日は、汝を死に導く』」

一瞬言葉が区切られた後、無機質な声色が隣から伝わってきた。
思わずそちらを見ると、ランの目が光を失い、口が事務的にそんな
言葉を紡いでいた。

す　と目に光が宿り、ランは自身が口にした言葉を恐れるよう
に再認した。

「死……？」

「オイ！」

ランの肩を掴み、ソファに押し倒すように彼女と目を合わせる。
俺は今、野獣のような目をしていただろう。自分でも興奮してい

るのが分かる。

「お前の予言は、書き換えられるのか？」
びくつと、ランは体を縮ませる。

「あ……え……？」

俺はそのままじつとランの言葉を待った。

「わ、私の《力》は、私と私が触っている相手のことを予言します
が……」

その先の言葉を口にするのが恐ろしいとでも言つように口を噤む。

俺は眼で無言の催促。

嘘だろ？

嘘なんだろ？

俺は、こんなところで死にたく……

「予言が覆されたことは、一度もありません」

目標

パニックに陥った俺は、その後ギルドから飛び出していた。かといって何も持たない俺に、行くあてなどある訳がない。街の中を駆け回り、人目の付かない建物の影に落ち着いていた。

「死……か」

ふと、その言葉が口を突いた。

『沈む日は、汝を死に導く』

予言を思い出す。

簡潔で分かりやすい言葉だ。

改めて見れば、なんということはない。

俺が死ぬ。

それだけ。

ふと今までのことを思い返す。

……何もなかった。

俺は記憶喪失なのだ。思い出すものと言えば、今日の記憶だけだ。気が付いたら道端にいて、街を指指して一時間。

金を工面すべくギルドを指し、ガルの所為で喧嘩を吹っかけられる。

そしてランと話して……終わり。

言葉にすれば三文で終わる『俺』の人生。

たったこれだけなのに、記憶じゃないどこかが死にたくない、死にたくないと呼んでる。

生への執着だけじゃない、もっと別の濃い理性というべき何かからの……。

「俺が死ぬまで……後少し」

影から少し出て、日を見上げる。

空は赤く、日は沈みかかっていた。予言が本当なら　本当、なんだろうな　日が沈んで俺は死ぬ。

「ん？」

待てよ、言葉に釣られて肝心なことを聞いていなかった。

俺はどうやって死ぬんだ？

予言という『力』が丁寧に教えてくれるとは到底思わないが、そこにヒントはなかっただろうか？

「沈む日は、汝を死に導く」……」

予言を復唱すると、頭が違和感を訴えた。意識して理解に努めたからだろう。一度聞いただけでは分からない、なんとも言えないニュアンスの違いがあつた。

「ああ……」

思考の末、その違いの意味にたどり着く。

俺は勝手に今日の日が沈む頃に死ぬと思いこんでいた。そこに「導く」という言葉が加わって違和感になっていたんだ。導くという言葉は、もっと動的なものはず。『答え』ではなく『流れ』。

その言葉を、俺は死ぬ、ではなく、俺が死に近づく、と、考えられはしないか？

そして、「沈む日」というのは、本当に時間を指しているのか？それが『原因』だとは考えられないだろうか？

沈む日が、あるいはそれに起因する行動が原因で、俺を死に至らしめると。そう考えることはできないのだろうか？

さらに言えば、「沈む日」というのが何らかの隠喩である可能性も高い。

つまり予言の勿体つけた回りくどい言葉で端的に表された結果が『沈む日は、汝を死に導く』。

俺の死は、確定じゃない。

少なくともまだ、幾許かの余裕はある。

俺は体に活力が漲るを感じた。

近いうちに死ぬかもしれない。だけど、それ以上にこの場にいられることがなんとも素晴らしいことのように思える。どうやら記憶を失う前の俺はそういう人間のようなのだ。生きることって素晴らしい。パシッと小気味のいい音を、合わせた拳と掌で鳴らす。

「生き残る」

今の目標。

記憶を持たない俺の、最初の目標。

成るようにしか成らない。

それが予言というものだ。

逆に言えば、為しても成るし、為さずとも成る。

そこには絶対に違いがあるはずだ。なら俺が目指すべきは、予言を予言のまま、俺の都合のいいよう変えること。

俺の思惑で、予言を、未来を変えて見せる！

「くはっ。やる気、湧いてくるぜ」

ハハ。勝手に絶望して、一時間経たず自己解決。そしていつの間にかやる気満々。

飛び出していったのがバカみたい。

いや、バカだ。

どう考えてもバカだ。

そして俺が思いついた予言の落とし穴。ランも気付いていたのだとしたら、話を聞かず出て言った俺は大馬鹿もの以外の何物でもない。大恥だ。

なんというか、俺は肝心なところが抜けてるようだ

「やれやれ……」

バカはバカらしく、一度無様に謝りますか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4773r/>

異界の界

2011年6月18日15時57分発行